

(英語版)

(アラビア語版)

(目次)

(SF小説) ナクバの東 (二十二)

第一部「イスラエル、イラン核施設を空爆す」(十九)

第六章 三羽の小鳥(三) 「アブダラー」 (二―三)



実は彼自身「アブダラー」と言うニックネームが好きになれないのである。「アブダラー」は最もありふれたアラブ人の名前であり、「アブドゥ(僕…しもべ)」と「アラ―」を合わせたもの、即ち「アラ―の僕」と言う意味がある。「アブダラー」自身にとつてはイスラム色の強すぎるこの名前が嫌だったのである。しかし彼はそれを我慢した。いずれそのようなことを意識せずに済む日が来ると信じていたからである。

三人のパイロットはそれぞれの思いを抱きつつ夜明けの砂漠と地平線の太陽を凝視していた。しかしいつまでももの思いに耽ける余裕はない。なにしろ彼らは現在サウジアラビアの領空すれすれを飛んでいるのである。サウジアラビア空軍には地上レーダーと早期警戒機AWACSが完備しており、上空を通過する三機を察知しているであろう。サウジアラビア戦闘機がスクランブル(緊急発進)をかけ、イスラエル戦闘機をインターセプト(迎撃)するかもしれない。だから一時たりとも警戒を怠れない。

(続く)

荒葉一也

(From an ordinary citizen in the cloud)